新　刊

□得居　修：**えひめの木の名の由来**　493 pp. 1995. 愛媛の森林基金．￥2,030＋送料．

本書は著書は得居氏なのだが，奥付以外にはそれが表示されていない．県農水産部内の「愛媛の森林（もり）基金」が企画した事業として調査刊行されたものではあるが，真の製作者が表にでてこないのはおかしなはなしである．発展途上国の刊行物で，実際の製作者ではなく，それを命じた機関の長や機関名しか表に出ていないものがあるが，それと同じ印象を受ける．著者として奥付に名前がある以上，主体となって努力した人の責任を明らかにするうえでも，表紙に氏名を入れるべきである．こういう本は，図書の整理のときたいへん困るのである．発行者の理解が望まれる．

われわれが植物学的情報交換を行う際には，植物名は記号として扱われ，学名や標準和名のような，種類と1：1に対応する名前しか用いない．これに対して方言名・俗名はその土地々々の人々が生活の必要上用いるもので，民族文化の所産である．それを記録しておくことは，単に無形文化財を保存するという消極面ばかりでなく，各地でそれらが集積されれば，文化の流れを解明したり，標準和名を解釈する手段となり得る．しかし植物方言調査という仕事が理学部や農学部に受け入れられる余地はなさそうで，地域の研究者の永年にわたる地道な努力に待つほかはない．最近刊行される植物図鑑や百科事典類には，専門家による和名の由来の解説が見られるが，先行大家の解釈を民族文化の素養のないまま不用意に受け売りすることについて，深津　正氏が本書巻頭の小文でそれとなく批判しておられる．本書は愛媛県産の313樹種について，ほぼ同じ形式で記述されている．まず標準和名とその植物学的記述があり，続いて各地での方言名が市町村名と共にリストされている．記述年代や情報提供者についてのメモも，今後は必要になるだろう．というのは，方言名といっても新旧があり，最近のラ抜き言葉のように，日本語の変遷と密接に関係していることがあり得るからである．方言名を時間の中に位置づけておけば，その応用は植物分野を超えて広がる可能性がある．それから標準和名についての解説が，多数の文献を引用して述べられ，続いて方言名についても実地調査の見聞を取り込みながら解説され，農事をはじめとする言い伝えが紹介されている．最後に，それらの裏付けとなる用途や民俗などがつけ加えられ，読み物としても興味をそそられる本である．

愛媛に限ったことではないだろうが，ヤマブキにトウシンという方言名があり，コゴメウツギ，キブシ，コガクウツギにも類似した名前がついていて，灯心に用いるとある．かつてわが家の燈明皿でヤマブキの髄を試したことがあるが，油を吸い上げてくれず失敗した．切片を作って見たら，本物の灯心（たぶんイグサ製）とは細胞間隙の量に大差があり，ナットクしたことがある．燈明として使うためには，髄の処理法にコツがあるのだろう．学校ではモミジの果実が「プロペラのように回転して飛ぶ」と教えているらしいが，あれが二つに分離することを，教師は見ていないらしい．言葉だけですべてを伝えることは，なかかなむづかしいものだ．連絡先は〒790-0001　松山市一番町4-2-2.　愛媛県農林水産部森林整備課，（財）愛媛の森林基金（電話089-941-2111　内線3361）.（金井弘夫）

□八田洋章：**木の見かた，楽しみかた　ツリーウォッチング入門**　294 pp. 1998. 朝日選書．朝日新聞社．￥1,500.

季節を追って，樹木を相手にした自然観察の着眼点を物語る本である．自然観察は盛んであるが，「名前を覚える」ということが目的になり勝ちで，その先は名前の由来とか有用性とか自然保護とか環境問題とかへ高飛びしてしまって，植物自体をじっくり知るという方向へはなかなか行かない．人とつき合うにしても，住んでいる町や家の造作をながめるより，その人の目鼻だちや能力を知る方が，より良く知る助けになるだろう．植物ではどこをどのように見たらよいかということを，わかり易く書いた本がないことが一因だと思